

# 樋口一葉

長谷川時雨

青空文庫



秋にさそわれて散る木の葉は、いつとてかぎりないほど多い。

ことに霜月は秋の末、落葉も深かろう道理である。私がここに書こうとする小伝の主いちよう一葉女史も、病葉わくらばが、霜の傷いたみに得堪えたえぬように散った、世に惜まれる女ひとである。明治二十九年十一月二十三日午前に、この一代の天才は二十五歳のほんに短い、人世なかばの半にようやく達したばかりで逝いつてしまった。けれど布は幾百丈あろうともただの布であろう。蜀しよく江かうの錦にしきは一寸でも貴く得難い。命の短い一葉女史の生活ページの頁じには、それこそ私たちがこれからさ

き幾十年を生伸びようと、とてもその片鱗へんりんにも触れることの出  
来ないものがある。一葉女史の味わった人世の苦味にがみ、諦めと、  
負まけじ魂との試練を経た哲学——

信実のところ私は、一葉女史を畏敬いけいし、推服してもいたが、私  
の性質さがとして何となく親しみがたく思っていた。虚偽いつわりのない、  
全くの私の思っていたことで、もし傍近くにいたならば、チクチ  
クと魂にこたえるような辛しん辣らつなことを言われるに違いないとい  
うようにも思ったりした。それはいうまでもなくそんな事を考え  
たのは、一葉女史の在世中の私ではない、その折はあまり私の心  
が子供すぎて、ただ豪えらいと思っていたに過ぎなかつた。明治四十  
五年に、故人の日記が公表おおよけにされてからである。私は今更、夢

の多かつた生活、いつも居眠りをしていたような自分を恥じもするが——幾度かその日記を繙ひもときかけては止やめてしまった。愛読しなかつたというよりは、実は通読することすら厭いやなのであつた。それは私の、衰弱しきつた神経が厭いとつたのであつたが、あの日記には美と夢とがあまりすくなくて、あんまり息苦しいほどの、切せ羽詰つばつた生活が露骨に示されているのを、私は何となく、胸むなぐら倉くらをとられ、締めつけられるような切なさに堪えられぬといった気持ちがして、そのため読む気になれなかつた。

しかし、今はどうかというに、私も年齢よわいを加えている。そして、様々のことから、心の目を、少しずつ開かれ風流や趣味に逃げて、そこから判断したことの錯あやまち誤まちをさとするようになった。この折こ

そと思つて、私は長くそのままにしておいた一葉女史の日記を読むことにした。すこしでも親しみをもちたいと思ひながら――

で、お前はどう思つたか？

と誰かにたずねてもらいたいと思う。何故ならば、私はせまい見解を持つたおりに、よくこの日記を読まないでおいたと思つたことだつた。拗ひねくれた先入観があつては、私はこの故人を、こう彷彿うかつと思ひ浮べることが出来なかつたであらう。よくこそ時機のくるのを待つていたと思ひながら、日記のなかの、ある行にゆくと、瞼まぶたを引き擦こするのであつた。それで私に、そのあとでの、故人の感じはと問えば、私はこう答へたい気がする。

露ふきの匂においと、あの苦味

お世辞氣のちつともない答えだ。四月のはじめに出る青い蔭のあまり太くない、土から摘立てのを齒にあてると、いいよのな爽やかな薫りと、ほろ苦い味を与える。その二つの香味が、一葉女史の姿であり、心意気であり、魂であり、生活であつたような氣がする。

文芸評に渡るようにはなるが、作物を通して見た一葉女史にも、ほろ苦い涙の味がある。どの作のどの女を見ても、幽艶、温雅、誠実、艷美、貞淑の化身であり、所有者でありながら、そのいずれにも何かしら作者の持つていたものを隠している。柔風にも得堪ない花の一片のような少女、萩の花の上におく露のような手弱女に描きだされている女たちさえ、何処にか骨のあるところ

がある。ことに「にぎり江」のお力りき、「やみ夜」のお蘭らん、「闇やみぎ桜くら」の千代子、「たま櫛だすき」の糸子、「別れ霜」のお高たか、「うつせみ」の雪子、「十三夜」のお関せき、「経づくえ」のお園——と数えれば数えるものの、二十四年から二十八年へかけての五年間、二十五編の作中、一つとして同じ性格には書いてないが、その底の底を流れて、隠しても隠しきれない拗すねた気質は、日記から読みとつた作者の、どこか打解けにくいところのある、寂しい諦めと、我がしゅう執がを見逃のがされない。

私は一葉女史の作中の人物をかりて、女史に似通っている点をあげて見たいと思った。も一つは、どの作が作者の気に入っている



た作か知りたいたと思った。それよりも深く知りたいたのは、どの作のどの女性が、最も深く作者の同情を得、共鳴のあるものかということであつた。最も高く評価されたのは「濁り江」のお力、「十三夜」のお関、「たけくらべ」のみどりであつたが、すべての女主人公を一固めにして、そして太く出た線こそ、女史の持つているほんとうの魂だという事が出来るであらう。

「経づくえ」は小説としては「にぎり江」や「たけくらべ」に競べようもない、その他の諸作よりも決して勝<sup>すぐ</sup>れてはいない。その構想も『源氏物語』の若紫を今<sup>いま</sup>様<sup>よう</sup>にして、あの華<sup>はな</sup>やぎを見せず<sup>ず</sup>に男を死なせ、遠く離れたのちに、男が死んだあとで、十六の娘<sup>なな</sup>がその人の情<sup>なさけ</sup>を恋うという、結末を皮肉にした短いものである。

けれども、その少女お園の心持ちは、内気な少女には、よく顔か  
れもし、残りなく書<sup>かきつく</sup>尽されてもいる。我と我身が怨めしいとい  
うような悩みと、時機を一度失えば、もう取返しをつかない、身<sup>み</sup>  
悶え<sup>もだ</sup>をしても及ばないくいちがいが、穏かに、寸分の透<sup>すき</sup>もなく、  
傍目<sup>わきめ</sup>もふらせぬようにぴったりと、悔<sup>くい</sup>というかたちもないもの  
中へ押込めてしまつて、長い一生を、凝<sup>じ</sup>つと、消<sup>きえ</sup>てしまつた故人  
の、恋心の中へと突進<sup>つき</sup>めてゆかせようとするのを、私は何とも形  
容することの出来ない、涙と圧迫とを感じずにはいられない。――  
――動きのとれない苦しみを知る人でなければと思うと、私はお園  
の上から作者の上へと涙をうつすのであつた。

——私の書方は、あんまり一葉女史を知ろうために、急ぎすぎているはしまいか。

或る人は女史を決して美人ではないといった。また馬場孤蝶氏の記するところでは、美人ではなかったが決して醜い婦人ではない。先ず並々の容姿であったとある。親友の口からそう極めがつけられているのを、見も逢いもせぬ私が、何故美人にしてしまうのかと、審いぶかしまれもしようが、私が作物を通して知っている一葉女史は、たしかに美人というのを憚はばからぬと思う自信がある。写真でも知れるが、あの目のあの輝き、それだけでも私は美人の資格は立派にあるといたい。脂粉に彩いろどられた傾けい国の美こそなかつたかも知れないが、美の価値を、自分の目の好悪こうおによって定め

る、男の鑑賞眼は、時によつて狂いがないとはいえない。あまりお化粧もしなかつたらしい上に、余裕のある家庭ではなし、ことに、

——なまめかしいという感じを与える婦人ではなかつた、艶つやはない、如何いかにもクスんだ所のある人であつた、娘というよりは奥さんといいたいような人であつた。当時の普通一般の女を離れて、男性の方に一歩変化しかけたように感ぜられる婦人であつた。挙止きよしは如何にもしとやかであつた。言葉はいかにも上品であつた。何処どこに女らしくないところ、何処どこに挙あげ得られないにかかわらず、何処どことなく女離れがしているように感ぜられた。多分は一葉君の気魄きはくの人を圧するようなど

ころがあつたからであらう。要するに、共に語つて痛快な婦人の一人であつたらう。男が恋うることなしに親しく交わりえられる婦人の一人だと私は思つていた。——馬場氏記——

とあるのから見ても、そうした婦人<sup>ひと</sup>で、並々の容色と見えれば、厚化粧で人目を眩惑<sup>げんわく</sup>させる美女よりも、確かであるということが出来ようかと思われる。

その上に、もし一度<sup>ひとたび</sup>興起り、想漲<sup>みなぎ</sup>り来つて、無我の境に筆をとる時の、瞳<sup>ひとみ</sup>は輝き、青白<sup>ほお</sup>い頬に紅潮のぼれば、それこそ他の模倣をゆるさない。引緊<sup>ひきしま</sup>つた面に、物を探る額の曇り、キと結んだ紅い唇<sup>くちびる</sup>、懊惱<sup>おうのう</sup>と、勇躍とを混じた表情の、閃<sup>ひらめ</sup>きを思えば、類

型の美人ということが出来よう。

誰に聞いても髪の毛は薄かったという事である。背柄せがらは中位であつたという。受け答えのよい人で話上じょうず手で、あつたとも聞いた。話込んでくると頬に血がのぼってくる、それにしたがつて話もはずむ。冷れい嘲ちような調子のおりがことに面白かつたとかいう。礼儀ただしので軀からだをこごめて坐つているが、退屈たいくつをすると鬢びんの毛の一、二本ほつれたのを手のさきで弄いじり、それを見詰めながらはなす。話に油あいてがのつてくると、間あいだをへだてていたのが、いつの間にか対手あいての膝ひざの方へ、真中にはさんだ火鉢ひばちをグイグイ押ししてくるほど一生懸命でもあつたという。

半日に一枚の浴衣ゆかたをしたてあげる内職うちわざをしたり、あるおりは荒あ

物屋ものやの店を出すとて、自ら買出しの荷物を背負せおい、ある宵よいは吉よ
  
 原しわらの引手茶屋ひきてぢややに手伝てづいにたのまれて、台所で御酒のおかんをし
   
 ていたり、ある日は「御料理仕出し」の招牌かんばんをたのまれて千蔭ちかげ
  
 流ふるの筆を揮ふるい、そうした家の女たちから頼まれる手紙の代筆をし
   
 ながらも、

小説のことに従事し始めて一年にも近くなりぬ、いまだよに
   
 出したるものもなく、我が心ゆくものもなし、親はらからな
   
 どの、なれは決断の心うとく、跡のみかへり見ればぞかく月
   
 日ばかり重ぬるなれ、名人上手と呼ぶるゝ人も初作より世に
   
 もてはやさるゝべきにはあるまじ、非難せられてこそそのあ
   
 たひも定まるなれと、くれ／＼せめらる、おのれ思ふには

かなき戯作げさくのよしなしごとなるものから、我が筆とるはまことなり、衣食のためになすといへども、雨露しのぐための業わざといへど、拙なるものは誰が目にも拙とみゆらん、我れ筆とるといふ名ある上は、いかで大方のよの人のごと一たび読みされば屑籠くずかごに投げらるゝものは得えかくまじ、人情浮薄にて、今日喜ばるゝもの明日は捨てらるゝのよといへども、真情に訴へ、真情をうつさば、一葉の戯著といふともなどは価のあらざるべき、我れは錦衣きんいを望むものならず、高殿たかどのを願ふならず、千載せんざいにのこさん名一時のためにはえやは汚がす、一片の短文三度稿をかへて而しかして世の評を仰がんとするも、空むなしく紙筆のつひへに終らば、猶なほ天命と観ぜんのみ。(一葉随



筆、「森のした草」の中より)

おろかやわれをすね物といふ、明治の清せいしやう少しょうといひ、女西さ  
いかく鶴といひ、祇園ぎおんの百合ゆりがおもかげをしたふとさけび小万茶  
屋がむかしをうたふもあめり、何事ぞや身は小官吏の乙おとむす  
娘めに生まれて手芸つたはらず文学に縁とほく、わづかに萩はぎ  
の舎やが流れの末をくめりとも日々夜々の引まどの烟けむりこゝろに  
かかりていかで古今の清くたかく新古今のあやにめづらしき  
姿かたちをおもひうかべえられん、ましてやにほの海に底ふ  
かき式部が学芸おもひやらるるままにさかひはるか也、ただ  
いささか六つななつのおさなだちより誰つたゆるとも覚えず  
心にうつりたるもの折々にかたちをあらはしてかくはかなき

文字沙ざたにはなりつ、人見なばすねものなどことやうの名を  
 や得たりけん、人はわれを恋にやぶれたる身とやおもふ、あ  
 はれやさしき心の人々に涙そそぐ我れぞかし、このかすかな  
 る身をささげて誠をあらはさんとおもふ人もなし、さらば我  
 一代を何がための犠牲などこと／＼し敷くとふ人もあらん、花  
 は散ちりどき時あり月はかくる時あり、わが如きものわが如くして  
 過ぬべき一生なるに、はかなきすねものの呼名よびなをかしうて、

うつせみのよにすねものといふなるは

つま子もたぬをいふにや有らん

をかしの人ごとよな（一葉随筆、「棹さおのしづく」より）

と、心を高く持っていたこの人のことを、私は自分の不文を恥じ

ながらも、忠実に書かなければならないと思う。ともかくも、私  
はまずこの人の生れた月日と、その所縁のつづきあいとを書落さ  
ぬうちにしるしておこう。

## 二

一葉女史は江戸っ子だ、いや甲州生れだという小さな口論争くちあらそい  
を私は折々聴いた。それはどつちも根拠のないあらそいではな  
った。女史が生れたのは東京府庁のあつた麴こうじまち町の山下町に初  
声ぶこえをあげた。明治五年には他ほかにどんな知名の人が生れたか知ら  
ぬが、私たち女性の間には、ことに文芸に携わるものには覚えて

いてよい年であろう。数え年の六歳に本郷ほんごう小学校へ入学した。その年は明治の年間でも、末の代まで記憶に残るであろう西南戦争のあつた年で、西郷隆盛が若くから国家のために沸かした熱血を、城山の土に濺そそいだ時である。翌年の七歳には特に手て習なら師匠にあがつた。一葉女史の筆蹟が実に美事であるのも、そうした素養がある上に、後に歌人で千蔭流の筆道の達者であつた中島師についたからだ。十五年の夏には下谷池したやいけの端はたの青海小学校へ移り、その翌年に退校した。その後は他で勉強したとは公にはされていない。十九年になつて中島歌子とじ刀自もとの許へ通うまでは独学時代であつたろうと考えられる。

それまでが女史の両親そろの揃つていた勉強時代、少女時代で、甲

州は両親の出生地であつた。父君は樋口則義ひぐちのりよし、母君は滝たきといつて、安政年間に志をたてて共に江戸に出、母は稲葉家いなばけに仕え、父は旗本菊池家に奉公し、後に八丁堀衆はつちようぼり（与力同心）に加わつた。そして維新後に生れた女史は、両親の第四子で二女である。甲斐かいの国東山梨郡大藤村は女史の両親を生んだ懐なつかしい故郷なので、小説「ゆく雲」の中には桂次けいじという学生の言葉をかりて、

我養家は大藤村の中萩原なかはぎわらとて、見わたす限りは天目山てんもくざん、大菩薩だいぼさつとうげ峠とうげの山々峰々垣をつくりて、西南にそびゆる白しろた妙えの富士の嶺ねはをしみて面かげを視しめさねども、冬の雪おろしは遠慮なく身をきる寒さ、魚うおといひては甲府まで五里の道をとりやりて、やうく鮪まぐろの刺身が口に入る位――

とある。その後の章には、

小<sup>こぼとけ</sup>仏の峠もほどなく越ゆれば、上野原、つる川、野田尻、

犬目、鳥沢も過ぎて猿<sup>ざる</sup>はし近くにその夜は宿るべし、巴<sup>はきよう</sup>峽

のさけびは聞えぬまでも、笛吹川の響きに夢むすび憂<sup>う</sup>く、こ

れにも腸<sup>はらわた</sup>はたたるべき声あり勝沼よりの端書<sup>はがき</sup>一度とゞきて四

日目にぞ七<sup>ななさと</sup>里の消印ある封状二つ……かくて大藤村の人に

なりぬ。

と故郷の山野の景色がかなり細叙してある。

父則義氏は廿二年ごろに世を去られた。それからの女史の生活は流転をきわめている。陶工であつた兄の虎之助氏は早くから別

に一家をなしていたので、女史は母滝子と、妹の国子と、かほそ疲細い女三人の手で、その日の煙りを立てなければならなかった。廿四年廿歳の時から廿九年までの六年間が製作の時代であつた。

生活の流転は、その感想、随筆、日記、があか明らかさまに語つてい  
る。女史の幼時にも彼女の家は転々した。本郷に移り下谷に移り、  
下谷御徒町おかちまちへ移り、芝高輪たかなわへ移り、神田神保町かんだじんぼううちように行き、  
あわじちよう淡路町になつた。其処で父君を失つたので、その秋には悲しみの  
残る家を離れ本郷菊坂町きくざかちように住居した。その後下谷竜泉寺町したや  
に移つた。俗に大音寺前だいおんじまえという場処で、吉原の構裏かまえうらであつ  
た。一葉の家は京町きようまちの非常門に近く、おはぐる溝どぶの手前側てまえがわ  
であつたという。ここの住居の時分から、女史の名は高くなつた

のである、そして生活の窮乏も極に達していた。荒物店あらかものやをはじめたのも此家ここのことであれば、母上は吉原の引手茶屋で手のない時には手伝いにも出掛けた。女史と妹の国子とは仕立したてものの内職ばかりでなく、蝉せみ表おもてという下駄げたのたみ表おもてをつくることもした。一葉女史のその家での書齋は、三畳ほどのところであつたという。荒物店の三畳の奥で、この閨けい秀しゅうの傑作つづが綴りだされようと誰が知ろう、それよりもまた、その文豪が、朝は風呂敷包みを背負つて、自ら多たち町ちょうの間屋まで駄菓子を買出しにゆき、蠟燭ろうそくを仕入れ、羽織を着ているために嘲ちやう笑しょうされたと知ろうか。彼女の家から灯が暁近くなるまで洩もれるのは、彼女の創作のためばかりではなかつた。あの、筆をもてば、倏たちど忽ころに想をのせて走る貴とうと



い指さきは、一寸の針をつまんで他家の新春の晴着はれぎを裁縫するのであつた。半日に一枚の浴衣ゆかたを縫いあげるのはさして苦でもなかつたらしいが、創作の気分の漲みなぎつてくるおりでも、米の代、小遣こづかい銭のために齷齪あくせくと針をはこばなくてはならなかつたことを想像すると、わびしさに胸が一ぱいになる。明治廿五年の正月には、元日ですら夜まで国子氏と仕立物をしていたという事を日記が語っている。

国子当時せみおもて蝉表てききなり職中一の手利こよいに成たりと風説あり今宵は例より、酒甘うましとて母君大いに酔給よいひぬ。

——片町といふ所の八百屋やおやの新芋いものあかきのみえしかば土産にせんとて少しかふ、道をいそげばしとど汗に成りて目にも

口にもながれいるをはんけちもておしぬぐひくして――

とあるのにもその生活の一片が見られる。父の則義氏は漢学の素養もあり文芸の何物かをも知っていたが、母君は普通の気量きがさな、かなり激しい気質の人であつたらしい。日記にあらわれた借財のことは、廿年の九月七日にはじまっている。そして、

――我身ひとつの故成りせばゆえないかゞいやしきおり立たる業をたち

もして、やしなひ参らせばやとおもへど、母君はいといたく名をこのみ給ふ質たちにおはしませば、児賤業をいとなめば我死すともよし、我をやしなはんとならば人めみぐるしからぬ業をせよとなんの給ふ、そもことはりぞかし、我両方わがふたかたははやく志をたて給ひてこの府にのぼり給ひしも、名をのぞみ給へ

ば成りけめ。

とあるにも母君の面影が知れる。そうした気位が高くていながら、乏しい暮しのために、しかもそうした堅気かたぎの士族出が、社会の最暗黒面である廓さと近くに住居して、場末の下層級の者や、流れ寄つた諸国の喰詰くいづつめものや、そうでなくても闇やみの女の生血いきちから絞りとる、泡あぶく銭ぜにの下滓かすを吸つて生きている、低級無智な者の中にはさまれて暮していなければならなかつた母君の、ジリジリした気持ち——（気勝きしょう者）といわれる不ふ幸しあわせな気質は、一家三人の共通点であつた。

一葉女史たそがれが近視眼だつたのは、幼時土蔵の二階の窓から、ほんの黄昏たそがれの薄明りをたよりにして、草双紙くさごうしを読んだがためだと

いう事ではあるが、そうした世帯の、細<sup>ほそ</sup>心<sup>しん</sup>の洋燈<sup>ランペ</sup>の赤いひかりは、視力をいためたであろうし、その上に彼女は肩の凝る性分であつて、年若い女史にそう早く死の來ることなどは、誰<sup>たれ</sup>人も思ひよらなかつたおり（死の六年前に）医学博士佐々木東洋氏が「この肩の凝りが下へおりれば命取りだから大事にせよ」と言われたということなどを思つて見ても、早世は天命であつたかも知れないが、あまり身心を費消させた生活が、彼女の死を早めさせたのだ。

私は頃<sup>このころ</sup>日、馬琴翁<sup>ばきん</sup>の日記を讀返して見て感じたのは、あの文人が八十歳にもなり、盲目にもなつていながら、著作を捨てな

つた一生が、女史のそれと同様に、焼火箸を咽喉もとに差込まれるような感じをさせることであつた。

女史の記録を読むと、明治廿四年——（一葉廿歳の時）十月十日に兄の家は財産差押えになるといふ通知をうけたくだりに、金三円斗りもあれば破産の不幸にも至るまいといふ書状から推して、杖とも頼む男兄弟の、たよりにならなかつたことがしれ、かえつて妹たちの方が苦しいなかからその急を救つた。

「家の方は私の稽古着を売つてもよいから」といつて、親子の膏であり、血となる代の金四円を、母を車に乗せて夜中ではあれど届けさせた。

ある時は貧に倦じた老女の繰言とはいえ、

「あな侘<sup>わび</sup>し、今五年さきに失<sup>うせ</sup>なば、父君おはしますほどに失なば、かゝる憂<sup>うれ</sup>き、よも見ざらましを我一人残りとゞまりたるこそかへす／＼口をしけれ、我詞<sup>ことば</sup>を用ひず、世の人はたゞ我れをぞ笑ひ指さすめる、邦<sup>くに</sup>も夏もおだやかにすなほに我やらむといふ処、虎之助がやらむといふ処にだにしたがはゞ何条ことかはあらむ、いかに心をつくりたりとて手を尽したりとて甲斐<sup>かい</sup>なき女の何事をかなし得らるべき、あないやいやかかる世を見るも否<sup>いや</sup>也」

と朝夕に母に搔<sup>かき</sup>くどかれては、どれほどに心苦しかったであろう。おなじ年（廿六年四月十三日の記に）、

母君更<sup>ふけ</sup>るまでいさめたまふ事多し、不幸の子にならじとはつ

ねの願ひながら、折ふし御心みこころにかなひ難きふしの有あるこそかなし。

とあるに知る事が出来る。

朝には買出しの包みを背負つて、駄菓子問屋の者たちから「姐ねえさん」とよばれ、午後には貴紳の令嬢たちと膝ひざを交えて「夏子の君」と敬される彼女を、彼女は皮肉に感じもした。けれども恩師中島歌子は、一葉の夏子を自分の跡目をつぐものにしようとまで思つていたのであつた。であればこそ、同門の令嬢たちも、一葉という文名嘖々さくさくと登る以前にも、内弟子同様な身分である夏子を卑しめもしなかつたのであろう。

ある時、女史は雨傘を一本も持たなかつた。高下駄あしだの爪つま皮かわも

なかつた。小さい日ひ和洋傘りがさで大雨を冒おかして師のもとへと通つた。

またある時は（新年のことであつたと思う）晴着がないので、国子の才覚で羽織の下になるところは小切れこぎをはぎ、見える場ところにだけあり合せの、共切れともぎを寄せて作つた着物をきていったことがある。勿論もちろん裾廻すそまわしだけをつけたもので、羽織が寒さも救えば恥をも救い隠したのである。そうしても師の許もとへ顔をだす事を怠おこたらなかつたわけは、他ほかにもあるのであつた。歌子は裁縫や洗濯せんたくを彼女の家に頼んで、割わりのよい価を支払らつていた。師弟の情じょう誼ぎのうるわしきは、あるおり、夏子に恥をかかせまいとして、歌子は小紋ちりめんの三枚重ねひきの引ひきとききを、表だけではあつたが与えもした。



「蓬生日記」の十月九日のくだりには、

師の君に約し参らせたる茄子なすを持参す。いたく喜びたまひてこれひる飯げの時に食はばやなどの給ふ、春日かすがまんぢうひとつやきて喰くひたまふとて、おのれにも半なかばを分わけて給ふ。

とあるにも師弟の關係の密なのが知られる。けれども歌子は一葉をよく知っていた。あるおり『読売新聞』の文芸担当記者が、當時の才媛について、萩の屋門下の夏子と龍子たつこ——三宅花圃みやけかほ女史——の評を求めたおり、歌子は、龍子は紫式部であり夏子は清少納言であろうと言ったとか、一葉も自分で、清少納言と共通するもののあるのを知っていたのかとも思われるのは、随感録「棹さおのしづく」に、

少納言は心づからと身をもてなすよりは、かくあるべき物ぞかくあれとも教ゆる人はあらざりき。式部はおさなきより父為時がをしへ兄もありしかば、人のいもうととしてかずかすにおさゆる所もありたりけんいはゞ富家に生れたる娘のすなほにそだちて、そのほどほどの人妻に成りたるものとやいはまし——かりそめ仮初の筆すさび成りける枕の草紙をひもとき侍るはべに、うはべは花紅葉もみじのうるはしげなることも二度三度見もてゆくに哀れに淋しきけ氣ぞ此中このなかにもこもり侍る、源氏物がたりを千古の名物とたゞゆるはその時その人のうちあひてつひにさるものゝ出来いできにけん、少納言に式部の才なしといふべからず、式部が徳は少納言にまさりたる事もとよりなれど、さり

とて少納言をおとしめるはあやまれり、式部は天つちのいと  
 しごにて、少納言は霜ふる野辺にすて子の身の上成るべし、  
 あはれなるは此君やといひしに、人々あざ笑ひぬ。  
 と同情している。

とはいえその間に女史一代の天華は開いた。

「名誉もほまれも命ありてこそ、見る目も苦しければ今宵は休み  
 給へ」

と繰返し諫める妹のこともききいれず、一心に創作に精進し、大音寺前の荒物屋の店で、あの名作「たけくらべ」の着想を得たのであった。けれどもまた、漸く死の到来が、正面に廻つて来たのであったが、そうとは知りようもなく、ただ家の事に

つき、母を楽しませる事についても、一層氣掛りの度合どあいが増したものと見え、彼女は相場そうばをして見ようかとさえ思ったのだ。

私は此処まで書きながら、私も母の望みを満みたそうと、そんな考えを起した事が一再ならずあったので、この思いたちが突飛とつぴではない、全く無理もないことだと肯定する。その相場に関して、

「天啓顕真術本部」という、妙な山師のところへ彼女がいったことから、すこしばかり恋愛をさがしてみよう。

あらものや 荒物店を開いた時のことも書残してはならない。

——夕刻より着類きるい三口持ちて本郷いせ屋にゆき、四円五十銭を得、紙類を少し仕入れ、他のものを二円ばかり仕入れたとある。

今宵はじめて荷をせをふ、中々に重きものなり。

ともいい、日々の売上げ廿八、九銭よりよくて三十九銭と帳をつ  
 け、五厘六厘の客ゆえ、百人あまりもくるため大多忙だと記した  
 のを見れば、

なみ風のありもあらずも何かせん

一ひとは葉はのふねのうきよなりけり

と感慨無量であつた面影が彷彿ほうふつと浮かんでくる。

三

廿七年二月のある日の午後まに、本郷区真砂町卅二番地まぎごちようの、あ  
 ぶみ坂上の、下宿屋の横を曲つたのは彼女であつた。その路は馴な

染じみのある土地であった。菊きく坂ざかの旧居は近かった。けれども其処を歩いていたのは、謹つつし嚴みぶか深い胸に問いつ答えつして、様々に思おもい悩なやんだ末に、天啓眞術会本部を訪れようとしていたのであつた。

黒くろ堀べいの、櫛けやきの植く込みのある、小道を入つて、玄関に立つた彼女は、その家の主、久く佐さ賀か先生というのは、何々道人とでもいうような人物と想像していたのであろう。秋月と仮か名めいして取次ぎをたのんだ。

彼女は久佐賀某に面接したおり、

(逢あ見ればまた思ふやうの顔したる人ぞなき)

と、『つれづれ草』の中にある詞ことばを思出しながら、四十ばかりの

音声の静かにひくい小男に向合<sup>むき</sup>つた。

鑑定局という十畳ばかりの室<sup>へや</sup>には、織物が敷詰められてあり、額は二ツ、その一つには静心館と書してあり、書棚、黒棚、ちがい棚などが目<sup>めまぐるし</sup>苦いまでに並べたててあり、床<sup>とこ</sup>の間<sup>ま</sup>には二幅<sup>にふくつ</sup>対<sup>い</sup>の絹地の画、その床を背にして、久佐賀某は机の前に大きな火鉢を引寄せ、しとねを敷いていて彼女を引見したのであつた。

「申<sup>さるどし</sup>歳の生れの廿三、運を一時に試<sup>ため</sup>し相場をしたく思えど、貧者一銭の余裕もなく、我力にてはなしがたく、思いつきたるまま先生の教えをうけたくて」

と彼女は漸くに口を切つた。それに答えた顕真術の先生は、

「実に上々のお生れだが金銭の福はない。他の福祿が十分にある

お人だ。勝すぐれたところをあげれば、才もあり智もあり、物に巧たくみあり、悟道の縁えにしもある。ただ惜むところは望のぞみが大きすぎて破れるかたちが見える。天てん稟りんにうけえた一種の福を持つ人であるから、商あきないをするときいただけでも不用なことだと思うに、相場の勝負を争うことなどは遮さえぎってお止めする。貴女はあらゆる望みを胸中より退のぞいて、終生の願いを安心立命しなければいけない。それこそ貴女が天から受けた本質ほんしつなのだから」  
と言った。彼女は表面つつま慎しやかにしていても、心の底ではそれを聴いてフンと笑ったのであろう。

「安心立命ということは出来そうもありません。望みが大に過ぎ破れるとは、何をさしておっしやるのでしょうか。老たる母に朝



夕のはかなさを見せなければならぬゆえ、一身を贄にえにして一時の運をこそ願え、私が一生は破やぶれて、道ばたの乞食こじきになるのこそ終生の願いなのです。乞食になるまでの道中をつくるとて悶もだえているのです。要するところは、よき死処がほしいのです」と言出すと、久佐賀は手を打っていった。

「仰おっしやる事は我愛する本願にかなっている」

彼女と久佐賀との面会は話が合ったのであろう。月を越してから久佐賀は手紙をもって、亀井戸の臥龍梅がりようばいへ彼女を誘った。手紙には、

君が精神の凡ならざるに感ぜり、爾来じらいしたしく交わらせ給わば余が本望なるべし

などと書いたのちに、

君がふたゝび来たらせ給ふをまちかねて、として、

とふ人やあるところろにたのしみて

そゞろうれしき秋の夕暮

と歌も手も拙つたないが、才をもつて世を渡るに巧みなだけな事を尽してあつた。とはいへ、それを受けたのは一葉である。そんな趣向で手中にはいると思うのかと、直すぐに顕真術先生の胸中を見現みあらわしてしまった。日本全国に会員三万人、後藤大臣並びに夫人（象しょうじろう次郎伯）の尊敬一ひとかた方でないという先生も、女史を知ることが出来ず、そんな甘い手に乗ると思つたのは彼れが一代の失策であつたであらう。

彼女は久佐賀の価値ねうちを知った。彼れは世人の前へ被かぶる面で、彼女も贏得かちうることが出来ると思つたのであろう。彼女の手記には利己流のしれもの、二度と説を聴けば、厭いとうべくきらうべく、面に唾つばきをしようと思つうばかりだとも言い、かかるともがらと大事を語るのは、幼子おさなごにむかつて天を論ずるが如きものだ、思えば自分ながら我も敵を知らざる事の甚だしきだと、自分をさえ嘲笑あざわらつている。けれども久佐賀の方では、自分の方は名と富と力を貯えているものだと、慢じていたのであろう。そしてその上に、一葉の美と才と、文名とを合せればたいしたものだと己惚うぬぼれたのであろう。他の者には洩もらすのさえ恥はじているだろうと思われれる貧乏を、自分だけがよく知つていと思ひもしたのであろう。まだそれよ

りも、彼女が親と妹のために、物質の満足を得させたいと願っている弱みを、彼れは自分一人が承知しているのだと思いついてた。それのみならず彼れは、一葉を説破しえたつもりでいたかも知れない。

久佐賀は、金力を持つて、さも同情あるように附つけこ込んでゆこうとした。そうした男ゆえ、俺ならば大丈夫良かろうと錨いかりをおろしてかかったのかも知れない。ともかく彼れはやんわりと、勝気なる、才女を怒らせないような文面をもつて求婚を申入れた。それは廿七年の六月九日のことで女史が廿三歳の時である。

（貴女の御困苦が私の一身にも引くらべられて悲しいから、御成業の曉までを引受けさせて頂きたい。けれども唯ただ一面識のみでは、

お頼みになるのも苦しいだろうから、どうか一身を私に委ねてはくれまいか。)

そんな風な申込に対して苦笑せずにいられるだろうか？　いうまでもなく彼女は彼れを評して、笑うにたえたしれもの、投機師ののしと罵っている。世のくだれるをなげきて一道の光を起さんと志すものが、目前の苦しみをのがれるために、尊ぶべき操みさおを売ろうかと嘲笑した。とはいえ、救いは願っていたのである。そうした悲しい矛盾を忍ばねばならなかった貧乏は、彼女に女らしさを失わぬ返事を認めさせた。

(どうかそういう事は仰しやらないで、大事をするに足りるとお思ひになるならば扶助をお与え下さい。でなければ一言ひとことにお断

り下さい)

と彼女は明らかな決心を持って、とはいえ事の破れにならぬようにと、余儀なく祈る返事を出した。その後も五十金の借用を申込んだこともある。久佐賀も彼女の家を度々訪ずれた。

久佐賀と懇意になった後、直に彼女の一家は本郷へ引移った。

荒物店を譲って、丸山福山町の阿部家の山添いで、池にそうた小家へ移った。其処は「守喜」という鰻屋の離れ座敷に建てたところで、狭くても気に入った住居であつたらしかつた。家賃三円にて高しといつたのでも、質素な暮しむきが見える。現にこの間、歌舞伎座で河合、喜多村の両優によつて、はじめて女史の作が劇として上場されたあの「濁り江」は、この家に移ってから、その

近傍の新開地にありがちな飲屋の女を書いたものであった。女史は其処に移つてからもそうした種類の人たちに頼まれて手紙の代筆をしてやった。ある女は女史の代筆でなくてはならないとて、数寄屋町の芸妓になつた後もわざわざ人力車に乗つて書いてもらいに来たという。「濁り江」のお力は、その芸妓になつた女をモデルにしたともいわれている。そしてそこが終焉しゅうえんの地となつた。

引越しの動機が彼女の発起でないことは、

国子はものに堪忍たえぶの氣象とぼし、この分厘にいたく厭あきたるころとて、前後おもんばかりの慮なくやめにせばやとひたすら進む。母君もかく塵ちりの中ちりにうごめき居らんよりは小さしといへど門構へ

の家に入り、やはらかき衣類にても重ねまほしきが願ひなり、  
 されば我もとの心は知るやしらずや、兩人とも進むこと切  
 なり。されど年としごろ比売尽し、かり尽しぬる後の事とて、この  
 店を閉ぢぬるのち、何いずかた方より一銭の入金のあるまじきをお  
 もへば、ここに思慮を廻めぐらさざるべからず。さらばとて運動  
 の方法をさだむ。まづかぢ町ちやうなる遠銀えんぎんに金子きんす五十円の調達  
 を申込む。こは父君存ぞんしやう生の頃よりつねに二、三百の金は  
 かし置おきたる人なる上、しかも商法手広く表をうる人にさへあ  
 れば、はじめてのこととて無情なさけなくはよもとかゝりしなり。

(「塵中日記」より)



私はもうこの辺で、その人のためには、茅屋ぼうおくも金殿玉楼と思  
いなして訪といおとずれた、その当時はまだ若盛りであつた、明治  
文壇の諸先輩の名をつらねることも、忘れてならない一事だろ  
うと、ほんの、当時の往来だけでもあつさり書いておこうと思  
う。

第一に孤蝶子——馬場氏が日記の中で巾はばをきかしている——先  
生の熱心と、友愛の情には、女史も心を動かされた事があつたの  
であろう。その次には平田ひらた禿木とくぼく氏であろう、この二人のため  
はかなり日記に字数が納められている。そしてこの二人の親密な  
友垣の間にあつて、女史は淡い悲しみとゆかしさを抱いていたの  
であろう。

「水の上日記」五月十日の夜のくだりには、池かえるに蛙かえるの声しきりに、

燈影とうえい風にしばしばまたたくところ、座するものは紅顔の美少年  
馬場孤蝶子、はやく高知の名物とたたえられし、兄君辰猪たつひが気魂  
を伝えて、別に詩文の別天地をたくわゆれば、優美高潔かね備え  
て、おしむところは短慮小心、大事のなしがたからん生れなるべ  
けれども歳は、廿七、一度跳わたらば山をも越ゆべしとある。

平田禿木は日本橋伊勢町の商家の子、家は数代の豪商にして家  
産ようや今漸くかたぶき、身に思うこと重なるころとはいえ、文学界中  
出色の文士、年齢は一の年少にして廿三とか聞けり。今の間に高  
等学校、大学校越ゆれば、学士の称号目の前にあり、彼れは行ゆくみ  
水の流ずれに落花しばらくの春とどむる人であろうといい、（親  
密々々）これは何の言葉であろうと言ひ、情に走り、情に酔う恋

の中に身を投げいれる人々と、何気なくは書いているものの、更けて風寒く、空には雲のただずまい、月の明暗する窓によりて、沈黙する禿木氏と、燈ともしび火の影によく語る孤蝶子との中にたつて、茶菓さかを取まかなつていた女史の胸は、あやしくも動いたのである。

此処へ川上眉山びざん氏がまた加わらなければならぬ。彼女は初めて逢つた眉山氏をどう見たろうか、彼女はこう言っている。

年は廿七とか、丈たけ高く、女子の中にもかゝる美しき人はあまた見がたかるべし、物言ひ打笑うちえむとき頬のほどさと赤うなる。男には似合しからねど、すべて優やさ形がたにのどやかなる人なり、かねて高名なる作家ともおぼえず心安げにおさなびたり。

とて、孤蝶子の美しさは秋の月、眉山君は春の花、艶えんなる姿は京の舞姫のようにて、柳やなぎばし橋の歌妓にも譬たとえられる孤蝶子とはうらうえだと評した。

馬場氏の思いなげに振舞うのが、禿木の気を悪くするのであるうと、侘わびしげにも言っている。そして眉山氏も一葉党の一人になつてしまった。禿木は孤蝶子との間に疑いを入れて、ねたましげでもあつたであらう。それもそのはずで、

孤蝶子よりの便りこの月に入りて文三通、長きは巻紙六枚を重ねて二枚切手の大封おおふうじなり。

とある。同じ中に、

優なるは上田君ぞかし、これもこの頃打しきりてとひ来る。

されどこの人は一景色ひとけしきことなり、万よろずに学問のほひある、  
洒落しやらくのけはひなき人なれども青年の学生なればいとよしか  
し

とあるは、柳村、敏博士びんのことである。その他に一葉の周囲の男  
性は、戸川秋骨、島崎藤村、星野天知てんち、関如来にょらい、正直しょうじき  
正太夫ようだゆう、村上浪六なみろくの諸氏が足近かつた。

正太夫は緑雨りよくうの別号をもつ皮肉屋である。浪六はちぬの浦浪  
六と号して、撥鬢奴ぼちびんやつこ小説で溜飲りゆういんを下げてしかも高名であ  
つた。渋仕立しぶじだての江戸っ子の皮肉屋と、伊達小袖だてこそでで寛濶の俠氣を  
売物の浪六と、舞姫のように物優しい眉山との三巴みつどもえは、みん  
な彼女を握ろうとして、仕事を巧みすぎて失敗した。眉山は強しい

て一葉の写真を手に入れたのちに、他から出た噂うわさのようにして、眉山一葉結婚云々と言い触ふしたのでうとまれてしまった。

正太夫年齢は廿九、瘦やせ姿の面めんやうすぐ味を帯びて、唯くちも口

許とにいひ難がき愛あい敬きやうあり、綿めん銘めい仙せんの縞しまがらこまかきあきわせ

に木綿もめんがすりの羽織は着たれどうらは定めし甲斐かい絹きぬなるべく

や、声こゑびくなれど透す通きれるやうの細くすずしきにて、事理明

白しろにものがたる。かつて浪六がいひつるごとく、かれは毒筆

のみならず、誠に毒心を包蔵せるのなりといひしは実に当れ

る詞ことばなるべし

と評した斎藤緑雨を、そう言ったほど悪くはあしらいもしなかつた。かえつて二人は人が思うより気が合った。皮肉屋同士は会心

の笑みをうかべあいもした。妻帯の事についてもかなり打明けて語りあっている。でありながら最後に（彼れの底の心は知らぬでもない）と冷たくあしらったのは、あまり正太夫が自分の筆になる鋭利な小説評が、その当時の文壇の勢力を左右した力をもって、折々何事にもあれ一葉の行方を差さししめ示し顔に、その力量をほのめかして、感得させようとしたのから、反抗を買ってしまった。浪六にはその前年から頼んであった金策のことで、大晦日おみそかの夜も待まちあか明したのであったが、その年の五月一日になってもまだ絶えて音信をしなかつたので、

誰もたれも言ひがひのなき人々かな、三十金五十金のはしたなるに夫それをすらしみて出し難しとや、さらば明ととのかに調へが

たしといひたるぞよき、えせ男作りて、髭ひげかき反そらせどあはれ  
見にくしや

と吐はきだすように言われている。その他に樋口勘次郎は、身は厭  
世教を持したる教育者で、しかも不めとらず娶主義の主張者でありなが  
ら、おめもじの時より骨のなき身になったといつて、

勿体なくも君を恋まつれる事幾十日、別紙御一覽の上は八つ  
ざきの刑にも処したまへ

とて熱書を寄せもした。されば、

にくからぬ人のみ多し、我れはさは誰と定めて恋渡るべき、  
一人のために死なば、恋しにしといふ名もたつべし、万人の  
ために死ぬればいかならん、知しるひと人なしに、怪しうこと物に



やいひ下されんぞそれもよしや。

と思慕の情を寄せてくれる人々に対して誠を語っている。とはいえ、それは思われるに對してである。物思う側の彼女をも、思われた唯一人の幸福者をも記しるそう。

#### 四

さても、さほどまでに多くの人々に懐かしまれた女史の、胸のおくが隠処に秘めた恋は、片恋であつたであらうか、それともまた、互に口に出さずとも相恋の間柄であつたであらうか。日記に見える女史の心は動揺している。すくなくとも八分の弱身はあつたよう

に見られる。はじめから女史はその人を恋人として見たのではない。最初は小説の原稿を見てもらうために、先生として逢い、同時に、原稿を金子きんすに代えることも頼んだのだ。その人の友達が一葉の友でもあったので、二人を紹介したのがはじめだった。ところが、その人は、友達のように親しく一葉に同情し、友達よりも深い信実心まごころを示した。いかほど用心深い性質さがでも、若い女には若い血潮が盛られている。十九の一葉はその人を心から兄と思いつた。そしてその慕わしきは恋心となった。

「よもぎふ日記」二十六年四月六日の記に、

こぞの春は花のもとに至恋の人となり、ことしの春は鶯うぐいすの音  
に至恋の人をなぐさむ。

春やあらぬわが身ひとつは花鳥の

あらぬ色音にまたなかれつゝ

とある末に、

もゝのさかりの人の名をおもひて、

もゝの花さきてうつろふ池水の

ふかくも君をしのぶころかな

とある。桃の花のうつらう水というのこそ、彼女の二なき恋人の名なのである。その人こそ現今いまも『朝日新聞』に世俗むきの小説を執筆し、歌沢寅千代の夫君として、歌沢の小唄こ唄を作りもされる桃水とうすい、半井氏なからいのことである。

半井氏を一葉はどれほど思っていたであろうか、そして半井氏

は――

昔時は知らずやや老いての半井氏は、訪客の談話が彼女の名にうつると、迷惑そうな顔をされるところである。そして一ことも彼女については語らぬということである。関如来氏の談によれば、ある日朝から一葉が半井氏を訪ねたことがある。彼女の声  
が、訪れたということを格子戸の外から告げられると、二階に執筆中の半井氏は不在だと言つてくれと関氏に頼んだ。関氏が階下へおりてゆくと、彼女は上つて坐つて待つていた。関氏は何時も彼女の家を絶えずおとずれる訪客の一人であつて、いつも彼女にきようおう響き 応おうをうける側の人であつたので、こういう時こそと、自らが主人気取りで、半井氏が留守ならばとしきりに暇いとまを告げようと

する女史を引止めたうえに、<sup>すし</sup>鯨などまでとつて歓待した。そして午<sup>ひる</sup>ごろまで語りあつた。階上の半井氏は、時がたつにしたがつて、階下に用事があるようになったが、さりとして留守と言わせたのでおりの事は出来ず、人を呼ぶことは出来ず、その上灰<sup>はいふき</sup>吹をポンとならして煙管<sup>キセル</sup>をはたくのが癖であることを、彼女がよく知つていたので、そんな事にまで不自由を忍ばなければならなかつたので、彼女が辞し去つたあとで、こんな事ならば逢つて時間をつぶした方がよかつたと<sup>つぶや</sup>呟いたということである。その<sup>ひとこと</sup>一事をもつて<sup>すべ</sup>総ての推測を下すのではないが、憎くはないがこの女一人のためには、何もかも失つてもと思ひ込むほどの熱情は、なかつたのである。その、どこやら物足らなさを、彼女の魂の中の暴君が、

誇きずを疵きずつけられたように感じ、恋もし、慕いもしたが、また悔みもした。

勝氣きりの女はかなしかった。女人の誇りを、恋人の前でまで、赤裸せ裸らに投捨てられないものの恋は、かなしいが当然で、彼女は自ら火を点つけた焰ほのおを、自らの冷たさをもつて消そうと争った。

彼女の恋愛記は成恋でもなければ勿もちろ論ん失恋でもない。恋というものに対して、自らの魂のなかで、冷熱相戦った手記であると同時に、肉体と靈魂との持久戦でもあった。彼女もまた旧道徳に従ひつて、秘ひそかに恋に苦しむのを、恋愛の至上と思つていたらしい。

彼女を恋に導いた友達——野々宮某女は、思いあがつた彼女の誇りを利用して、巧みに離間しようとして成功した。とはいえ、

その実それは、一葉自身の弱点でもあった。

恋するものの女らしさ——私はそう思う時に女心の優しさにはほえまずにはいられない。それは彼女が初めて島田鬻まげに結ゆつた時のことである。その日彼女が半井氏を訪れたのは、人の口に仇名あだながのぼり、あらぬ名をうたわれるのを憤つて、暫時、絶交しようと思つての訪問であつた。そうした日であるのに、珍らしくも一葉は島田鬻まげの初結はつゆいをした。その日は二十五年六月二十五日のことである。

「しのぶぐさ日記」には、

梅雨つゆ降りつゞく頃はいと侘わびし、うしがもとにはいと子君おば伯母ばににしよ居にたり、君は次の間の書室めきたるところに打ふし居

たまへり。雨いたく降りこめばにや雨戸残りなくしめこめて  
いと闇くらし、いと子君伯母なる人に向ひて、御覽ごらうぜよ樋口さま  
のお髪ぐしのよきこと、島田は実によく似合給へりといへば、伯  
母君も実に左さなりく、うしろ向きて見せたまへ、まことに  
昔の御殿風と見えて品よき鬘かみの形かな。我は今いま様の根の下  
りたるはきらひなどいひ給ふ。半井君つと立たちて、いざや美し  
うなりたまひし御姿みるに余りもさし込めたる事よとて、雨  
戸二、三枚引あく、口の悪き男かなとて人々笑ふ。我もほゝ  
ゑむものから、あの口より世になき事やいひふらしつると思  
ふにくらしさに、我しらずにらまへもしつべし。

とある。けれども、何のためにさまで憎く思ったかといえば、そ



の前日、彼女が師の家にて同門の友達と雑談にふけたおり、誰彼の噂うわさに夜をふかすうちに、姦かしましきがつねとて、誰にはかかる醜行あり、彼れにはこうした汚行ありと論あげつらうを聞いて、彼女はもう臥床ふしどに入ろうとした師歌子の枕許もとへいつて身の相談をしようとした。それは、それより前の日に、伊藤夏子という人が席を立て、つて一葉をものかげに呼び、声をひそめて、

「貴女は世の中の義理の方が重いとお思いなさるか、それとも御家名の方が惜おしいと思いなさるか」

と聞かれたので、

「世の義理は重んじなければならぬものだと思ひます。けれども家の名も惜くないことはありません。甲乙がないといいた

いけれど、どうも私の心は家の方へ引かれがちです。何故なぜというのに、自分ばかりのことでなく、母もあれば兄きょうだい妹まいもあるのと答えた。

「では言わなければならぬことではありますが、貴女は半井さんと交際を断つ訳にはいかないでしょうか」といった。

彼女は友の視線があまりまぶしいので、何事と知らねど胸の中にもものたたまるように思われた。

「妙なことを仰しやるのね。それは何時いつぞやもお咄はなししたとおり、あの方はとしお齡も若いし、美しい御顔でもあるし私が行ったりするのは、憚はばからなけりやなるまいと思つています。幾度交際を断と

うと思つたかも知れはしません。けれど受けた恩義もあり、そうは出来かねているのよ、私というものの行いに、汚れのないのを御存知でありながら……」

と彼女は怨みうらみもした。

「そりやあ道理はそうですけれど——まあ訳はいずれ話しますが、どうしても交際が断てないというのならば、私でも疑うかもしれませんよ」

そういつて友は立別れた。一葉は、ふとその日の訝いぶかしい友の言葉を思い出したので、歌子によつてその惑いを解いてもらおうとしたのであつた。

「半井さんの事は先生がよく御承知であつて、訪問をお止めにな

らないのを、何ぞ噂するのでございましょうか」

と歌子にたずねた。すると歌子の返事は、実に意外に彼女の耳に鳴り響いた。

「では、行末の約束を契つたのではないのか」と。

彼女は仰天して、七年の年月を傍においた弟子の愚直な心を知らないのかと、怨<sup>うら</sup>み泣いた。

「でも、半井氏という人は、お前は妻だと言<sup>いい</sup>触らしているというではないか。もし縁があつてゆるしたのならば、他人がなんとやおうとも聞入れないがよい。もしそうでないのならば、交際しない方がよいだろう」

と歌子は論<sup>さと</sup>した。それ故にこそ彼女は梅雨の日を訪ずれたのであ

る。そして、絶交する人の目に、島田に結んだ姿を残そうとしたのである。

愛するあまりに、妻とも言ったであろうかの恋人に、その故に絶交しなければならぬ彼女は、たった一月前には思う人の病を慰めるためにと、乏しい中から下谷の伊予紋（料理店）へよつて、口取りをあつらえたり、本郷の藤村へ立寄つて蒸菓子を買ひととのえたりして訪れていた。ある時は、朝早くから訪れて午過ぎまで目ざめぬ人を、雪の降る日の玄関わきの小座敷につくねんと、火桶もなく待あかしていたこともあつた。彼女が手伝つて掃除すると、まめやかな男は、手製のおしるこを彼女にと進めたりした。彼女はその日のことを記した末、

半井うしがもとを出しは四時ころ成りけん、白皚々たる雪中、りん／＼たる寒気をおかして帰る。中々おもしろし、堀ばた通り九段の辺、吹かくる雪におもてむけがたくて頭巾の上ずきんに肩かけすつぽりとかぶりて、折ふし目斗さし出すもをかぬかりし、種々の感情胸にせまりて、雪の日といふ小説の一編あまばやの腹稿なる。

とある。恋に対して傲慢ごうまんであつた彼女にも、こうした夢幻境もあつた。恋という感想に、

我はじめよりかの人に心をゆるしたることもなく、はた恋し床ゆかしなどと思ひつることかけてもなかりき。さればこそあまたたびの対面に人げなき折々はそのことゝもなく打かすめて

ものいひかけられしことも有ありしが、知らず顔につれなうのみもてなしつるなり。さるを今しもかう無き名など世にうたはれて初はじめて処くちおせくなりぬるなん口惜くちおしとも口惜くちおしかるべきは常なれど、心はあやしき物なりかし、この頃降りつゞく雨の夕べなどふと有し閑居のさま、しどけなき打とけたる姿などそのこともなくおもかげに浮びて、彼かの時かはかくいひけり、この時はかう成りけん、さりし雪の日の参会の時手づから雑煮ぞうじにて給はりし事、母様の土産にしたまへと、干魚の瓶漬送られしこと、我参る度々に嬉しげにもてなして帰らんといへば今しばし／＼君様と一夕の物語には積日の苦をも忘るるものを、今三十分二十五分と時計打眺めながら引止められしことまし

て我ためにとて雑誌の創立に及ばれしことなどいへば更なり、  
久しう病わずらひ給ひその後まだよわよわと悩ましげながら、夏  
子さま召上りものは何がお好きぞや、この頃の病のうち無ふりよ  
聊うたえ堪それがたく夫それのみにて死ぬべかりしを朝な夕なに訪ひ給ひ  
し御恩何にか比せん、御礼には山海の珍味も及ぶまじけれど  
とて、兄弟などのやうにの給ふ。我料理は甚だ得手なり殊に  
五もくずし調ずること得意なれば、近きに君様正客にしてこ  
の御馳走ごちそう申すべしと約束したりき。さるにてもその手づから  
の調理ものは、いつのよいかにして賜はることを得べきなど  
思いひ出いるまゝに有しこと恋しく、世の人のうらめしう、今よ  
り後の身心いづぼそうなど取あつめて一つ涙ひぬものから、かく



なりゆき  
成行しも誰ゆゑかは、その源はかの人みづから形もなき事

まぎく言触しうしたればこそ……

とあるが、その実は野々宮某という女友達の嫉妬しつとから言触らされたの知らなかつたのである。

彼女は恋人から離れたと思ひ信じたが、彼女の心はそうゆかなかつた。或時は、

吹風のたよりはきかじ荻おぎの葉の

みだれて物を思ふころかな

とまで思い乱れ、またある時は伯父おじの病床に侍して（かゝる時の折ふしにも猶なお彼の人を忘れ難きはなぞや）といい、ある時は用もなきに近みちき路をえらんでゆき、その人の住む家の前を通りて見、

その家の下女げじよに行逢ゆきあいて近状を聞き、（万感万嘆この夜ねむ睡ることかたし）と書いたのは、彼女の青春二十一歳のことであつた。次の年の一月二十九日雪の降るのを見つつ、

わが思ひ、など降る雪のつもりけん

つひにとくべき中にもあらぬを

と嘆き四月の雨の日の記には、

わが心より出たるかたちなればなどか忘れんとして忘るゝにかたき事やあると、ひたすら念じて忘れんとするほど、唯身にせまりくるがごとおもかげのまのあたりに見えて得堪えゆべくも非あらず、ふと打みじろげばかの薬の香のさとかをる心地して思ひやる心や常に行通ふとそゞろおそろしきまでおもひし

みたる心なり、かの六条の御息所みやすどころのあさましさを思ふにげに偽りともいはれざりける。

おもひやる心かよはゞみてもこん

さてもやしばしなくさめぬべく

恋は、

見ても聞きてもふと思ひ初そむるはじめいと浅し、

いはでおもふいと浅し、

これよりもおもひかれよりも思はれぬるいと浅し、

これを大方おおかたのよに恋の成じょうじゆ就とやいふならん、逢あいそめて

うたがふいと浅し、

わすられてうらむいと浅し、

逢んことは願はねど相思はん事を願ふいと浅し、

なとりがわ

名取川瀬々のうもれ木あらはればと人のため我ためをし

むたぐひ、うきに過たる年月のいつぞは打とけてとはかなきを  
をかぞへ、心はかしこに通ふものか、身は引離れてことさま

になりゆく、さては操を守りて百年ももとせいたづらぶしのたぐひ、

いづれか哀れならざるべき、されど恋に酔ひ恋に狂ひ、この

恋の夢さめざらんかなかこの夢のうちいりたちに死なんとぞ願ふめ  
る、おもへば浅きことなり——誠入立いりたちぬる恋のおくに何物

かあるべきもありといはゞみぐるしく、憎く、憂く、愁つらく、

浅間しく、かなしく、さびしく、恨めしく取つめていはんに

は厭いとわしきものよりほかあらんとも覺おぼえず、あはれその厭いとわふ恋

こそ恋の奥なりけれ……

彼女の恋の信仰は頑固であつた。彼女は何処までも人生のほろにがさを好んだ。

暖かくなしい心持を抱いだいて歸つた雪の途中で出来上つた小説

「雪の日」は、その翌年に発表された。十六になる薄井うすいの一人娘

お珠たまが、桂木かつらぎ一郎という教師と家出をしたというのが筋である。

「媒なは過し雪の日ぞかし」ともあれば「かくまでに師は恋なしかり

しかど、ゆめさらこの人を夫と呼びて、俱ともに他郷の地をふまんと

は、かけても思ひよらざりしを、行方なしや迷ひ……窓の呉く竹たけ

ふる雪に心下したお折れて、我も人も、罪は誠の罪になりぬ」

とある。言わずともわが身——世馴れぬ無垢の乙女なればこうも  
 なるうかと、彼女自身がそうもなりかねぬ心の裏を書いて見たも  
 のと見ることが出来よう。

彼女は恋に破れても名には勝った。困窮は堪忍び得たが病苦に  
 は打敗うちまけてしまった。彼女の生存の末期は作品の全盛時にむかっ  
 ていた。『国民の友』の春季附録には、江見水蔭えみすいいん、星野天知ほしのてんち、後  
 藤とうちゆうがい宙外しんげい、泉鏡花に加えて彼女の「別れ路みち」が出た。評家は口  
 をそろえて彼女を讃たたえた。世人はそれを「道成寺どうじょうじ」に見たて、  
 彼女を白拍子しらびょうし一葉とし、他のものを同宿坊と言伝えたほどであ  
 った。それは二十九年一月のことである。その年の四月には咽喉のど

が腫<sup>は</sup>れ、七月初旬には日々卅九度の熱となつた。山竜堂<sup>さんりゅうどう</sup> 櫛<sup>かしむ</sup>

村博<sup>ら</sup>士も、青山博士も医療は無効だと断言した。十一月の三日

ごろから逆<sup>のぼせ</sup>上<sup>の</sup>のために耳が遠くなつてしまった。そして二十三日

午前<sup>せいきよ</sup>に逝<sup>き</sup>去<sup>よ</sup>した。かつて知人の死去のおりに持参する香<sup>こう</sup>燵<sup>でん</sup>が

ないとして、

我こそは達磨<sup>だるま</sup>大師になり<sup>に</sup>にけれとぶらはんにもあしなし

にして

といい、また他行のため洗<sup>あらい</sup>張<sup>は</sup>りさせし衣を縫うに、はぎものに

午前だけかかり、下まえのえり五つ、袖<sup>そで</sup>に二つはぐとて、

宮城<sup>みやぎ</sup>のにあらぬものからから衣なども木萩<sup>こはぎ</sup>のしげきなる

らん

と恬然てんぜんと一笑した人の墓石は、現今も築地つきじ本願寺の墓地にある。その石の墓よりも永久に残るのは、短い五年間に書残していった千古不滅の、あの名作名篇の幾つかである。

——大正七年六月——

昭和十年末日附記 随筆集『筆のまに〜』は、佐佐木竹ちくは

柏園くえん先生御夫妻の共著だが、その一二五頁「思ひ出づる

まに〜」大正七年六月の一節に「自分がいつか夏目漱石さんの所へ遊びに行つて昔話などをした時、夏目さんが、自分の父と一葉さんの父とは親しい間柄で、一葉さんは幼



い時に兄の許いいなすけ嫁よめのようになっていた事もあつたと言われた。明治の二大文豪の間に、さる因縁があつたとは面白いことである」とあつた。



# 青空文庫情報

底本：「新編 近代美人伝（上）」岩波文庫、岩波書店

1985（昭和60）年11月18日第1刷発行

2001（平成13）年7月9日第5刷発行

底本の親本：「近代美人伝」サイレン社

1936（昭和11）年発行

初出：「婦人画報」

1918（大正7）年6～8、10月

入力：小林繁雄

校正：門田裕志

2006年1月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 樋口一葉

## 長谷川時雨

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>